国　語　科

国語科部　　長嶋　愛香　田島　友香　桐生　直也
研究協力者　　濵田　秀行

Ⅰ　国語科における「社会に変革を起こす子ども」について

自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども

本校の学校教育目標「つよく　ただしく　かしこく」を具現化した児童を育成するために，国語科の学習では，言葉による見方・考え方を働かせながら，下記の資質・能力の三つの柱が相互に関係し合うことを活性化することで，「言葉による自他の認識・思考・表現から形成された考えを自ら関わらせ，深める資質・能力」を育むことが必要であると，これまでの研究において捉えた。

言葉による自他の認識・思考・表現から形成された考えを自ら関わらせ，深める資質・能力

(1) 知識及び技能

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関わる課題を解決するために必要な，言葉の特徴や使い方，情報の扱い方，我が国の言語文化に関する知識及び技能

(2) 思考力，判断力，表現力等

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関わる課題を解決するために必要な知識及び技能を適切に用いたり，形成した考えを他者と関わらせたりする力

(3) 学びに向かう力，人間性等

言葉がもつよさを認識し，進んで「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関わる課題を解決するために必要な知識及び技能を用いたり，形成した考えを他者と関わらせたりしながら，課題の解決に取り組み続けようとする態度

＜本校国語科が育成を目指す資質・能力の三つの柱＞

また，本校国語科における問題解決的な学習の過程は以下のとおりである。

過程	学習活動
つかむ	学習課題を設定する 学習課題の解決の見通しをもつ
ふかめる ※学習課題の解決に向け，単位時間ごとのめあてを設定する。 ※学習課題の解決に向け，点線の中を単位時間ごとに繰り返す。	めあてを立てる 言語活動を通しためあての達成に向け，考えをもつ　⇄　言語活動を通しためあての達成に向け，互いの考えを聴き合う めあての達成状況を振り返る
ふりかえる	学習課題の解決状況を振り返る 学んだことの生かし方を考える

＜本校国語科の問題解決的な学習の過程＞

本校国語科では，「社会に変革を起こす子ども」を，**「自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども」**とした。これは，言葉による見方・考え方を働かせながら，互いの考えに影響を与え合い，深め合う姿である。この姿が現れる問題解決的な学習の過程は以下の通りである。

「つかむ」過程において，児童は出合った言葉と，これまでの自分がもっていた，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての考えとのずれから課題意識をもつ。その課題意識と，教師の想定する言語活動を基に，単元全体で解決を目指す学習課題が設定される。「ふかめる」過程では，めあての達成に向けて，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての互いの考えを聴き合いながら，学習課題を解決する。そして，「ふりかえる」過程において，学習課題の解決状況を振り返るとともに，単元の学習を今後の生活や学習の中で役立たせる見通しとなるような，生かし方を考えていく。

聴き合うとは，自分の考えを単に他者に伝えることではなく，友達の考えを受け止めて聴きながら，課題の答えを協働的に創り出す営みのことである。この聴き合いの中で，互いの言葉やテキストの言葉を積極的に用いながら友達の考えを受け止めていた児童は，それらの言葉を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり，対象と言葉，言葉と言葉との関係を問い直したりしながら，課題の答えを創り出そうとしていた。これは，これまでの本校国語科が目指してきた「言葉による自他の認識・思考・表現から形成された考えを自ら関わらせ，深める資質・能力」を備えた児童の姿とも重なる。よって，国語科の問題解決的な学習の過程において，互いの言葉やテキストの言葉を進んで用いながら友達の考えを受け止めることができるよう，学習環境を整えていくこととした。

２　国語科における「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるための学習指導の工夫

本校国語科において，「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるために，「読むこと」の領域において，互いの言葉やテキストの言葉を用いながら，表出された考えを聴き合うことを目指した学習指導の工夫を行う。これは，Society 5.0で求められる人物像として，文章や情報を正確に読み解き，対話する力を確実に身に付けることが求められているためである。

全体研究で示している通り，「社会に変革を起こす子ども」は情報活用能力に長けている。国語科の学習の中で「社会に変革を起こす子ども」が活用する「情報」は，言葉そのものであり，言葉が示す内容や事柄である。次に示すのは，「読むこと」の領域における学習の中で，情報を活用する児童の姿を，全体研究で示している情報活用の四つの局面で捉えたものである。

【情報の収集】	テキストを読み，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉える。 テキストを読んで捉えた，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えの中で用いられている言葉を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉える。
【情報の吟味】	課題解決への必要性と照らし合わせて，対象と言葉，言葉と言葉との関係を捉え直す。
【情報の関連付け】	対象と言葉，言葉と言葉との関係についての自分の考えを，友達の考えやテキストの言葉と結び付ける。
【情報の処理，表現】	対象と言葉，言葉と言葉との関係についての自分の考えを友達に伝える。

これまでの本校国語科の実践や研究の中で,**「自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども」**に相当する児童は,「対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考え」や「テキストの言葉（本文の叙述)」から正確かつ適切に情報を得て,それらを吟味したり関連付けたりしながら用いる能力に長けていた。一方で,その場の思い付きや自分の好みのみで捉えたテキストの言葉に固執し，考えの変容が起こりにくい児童には，次のような姿が見られた。

・想像したことを，複数の本文の叙述と結び付けることができない。（文学的な文章）
【情報の関連付け】
・説明している内容や表現についての考えを，複数の本文の叙述と結び付けることができない。（説明的な文章）【情報の関連付け】

情報の関連付けの局面において，考えと複数の本文の叙述とを結び付けるためには，情報の吟味の局面において,今ある情報以外の情報を得ようとして,テキストの言葉に立ち返る必要がある。そこで,情報の吟味の局面に焦点を当て，ＩＣＴを活用した以下の学習指導の工夫を行うことにした。

録音した音読を聴く機会の設定（文学的な文章）

文学的な文章の学習において,**「自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども」**の姿が現れるためには，想像したことと根拠となる複数の本文の叙述とを照らし合わせる必要感の高まりが欠かせない。そこで，音読を録音し，その音読を聴く機会を設定する。文学的な文章を音読することは，自分の想像したことを表出する手段である。音読を聴くことで互いの想像の違いを感じ取り，違いの根拠となりうる本文の叙述を求めるようになる。録音した音読は各自のタブレットで保存し，蓄積することができ，繰り返し聴いたり，比較して聴いたりする機会が保障される。ペープサート等を用いた音読劇や群読等，映像化した方が考えが見えやすい場合には，録画したものを用いる。この学習指導の工夫は,「ふかめる」過程において，以下の手順で設定する。

① 授業前にあらかじめ本文の音読を個人のタブレットに録音する。
② 「友達の読み方から伝わってくる想像」に着目するための視点で，①の音読をペアの友達と聴く。その後，叙述に基づいた互いの想像を聴き合う。その後，ペアで一枚の本文シート上で，叙述に印をつけたり，想像したことを書き込んだりする。
③ ペアの友達と会話文を中心に音読をする。
④ ②と③を繰り返し行った後，ペアの友達と音読する様子を録音する。
（録音・録画機器の扱いは実態に応じて教師または児童が行う。音読劇や群読等の複数人を必要とする言語活動の場合，ペア同士を一つのグループとし，録音・録画を行う。）
⑤ ④をペア（またはグループ）で聴いた後，②と③を再び繰り返し行う。

１単位時間の学習では，②～⑤を行い，家庭学習で①を取り扱う。次に，中学年での例を示す。

第３学年「『モチモチの木』についてみんなで話そう『モチモチの木』（光村３下）

想像した場面の様子について聴き合い，本時の学習に対する問題意識をもつために，録音した音読を聴く機会の設定

視聴する際の視点：はっきりしない読み方はどこか

・音読を録音したカードを交換し，ペアの友達と互いの音読を聴く。そして，互いの読み方のずれを聴き合う。

Ａ：「〇〇君はさ，『じさまぁっ。』を大きな声で読んでるでしょ。どうしてそう読んだの。」

Ｂ：「だって，くまのうなり声が聞こえたらこわいでしょ。」

Ａ：「くまにばれたら殺されちゃうよ。おとうもくまに殺されているし。」

Ｂ：「そうか。じゃあ，もう少し小さい声で読んでみようかな。」

Ａ：「ちょっと読んでみてよ。」

加工した本文をデータ共有し，比較する機会の設定（説明的な文章）

説明的な文章の学習において，**「自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども」**の姿が現れるためには，説明している内容や表現についての考えと，根拠となる複数の本文の叙述とを照らし合わせる必要感の高まりが欠かせない。そこで，加工した本文をデータ共有し，それを比較する機会を設定する。加工した本文とは，説明的な文章の一部を削除したり選択した叙述をつなぎ合わせたりしたものである。加工の方法は，以下のように発達段階に応じて教師が設定する。

〇本文の一部に丸を付けたり，線を引いたりする。（低学年向け）
〇本文の一部を抽出したり，削除したりする。（中学年向け）
〇本文から選択した叙述をつなぎ合わせる。（高学年向け）

説明的な文章を加工することは，説明している内容や表現についての自分の考えを表出する手段である。加工した本文を比較することで互いの考えの違いを感じ取り，違いの根拠となりうる本文の叙述を求めるようになる。データ共有された本文は，互いの考えを可視化・共有化することを容易にし，他者と考えを聴き合う機会を十分に保障する。この学習指導の工夫は，「ふかめる」過程において，以下の手順で設定する。

① 本文を音読し，目的に応じて，タブレットに用意された本文の中の「大事な部分」と考える箇所を抜き出したり，「大事な部分」を落とさないように要約したりする。
② 加工した本文を音読し，実際の本文と照らし合わせながら，ペアの友達と考えを聴き合う。このとき，各自の端末を操作しながら，考えを修正する。
③ ②は修正の過程で随時，学級全体で共有し，互いの考えを比較したり，②を繰り返したり

しながら，さらに考えを修正する。

上記の①にある，「大事な部分」を抜き出す活動は主に低学年で，「大事な部分」を落とさないように要約する活動は中・高学年で設定する。また，②や③にある聴き合う活動の中では，「伝えたい大事なことは何か」「大事なことは伝わるか」等の，本文の叙述に基づいて「大事な部分」を考えていることを判断するための視点を提示し，対象と言葉，言葉と言葉との関係に焦点化して聴き合えるようにする。以下に，低学年での例を示す。

第２学年「大事なところを見つけて読もう『おにごっこ』『本でのしらべ方』（光村２下）」

問いの文の答えだと考えた部分に印をつけた本文をデータ共有し，比較する機会の設定

「大事な部分」：問いの文の答え

・互いの「大事なところ」をアプリケーション「ロイロノートスクール」で可視化・共有化し，ペアで考えを聴き合う。

Ｂ：「５（段落）の大事なところは，『おにが三人，四人…』のところでしょ。」

Ａ：「私は，『手をつないだ…』だと思うよ。だって，『なぜ，そのようなあそび方をするのでしょう。』が問いの文なんだから，Ｂくんのは理由じゃないでしょ？」

Ｂ：「（手つなぎ鬼をする理由に）なってると思うんだけど…。」

Ａ：「でも，『たいへんです。』が（文の）終わりなんだから，『楽しさが…』の方が大事じゃない？」

Ｂ：「確かに。他の人のも見ていい？」

（「ロイロノートスクール」の提出箱にある他の児童の考えの中にＡが同様に印がついていることを発見した後）

Ｂ：「Ａちゃんと同じところにピンクの線を引いてる人が多いね。でも，その後の『また…』のところまで引いてる人がいるよ。逃げる人も楽しくなるみたいなことなんじゃない？」

Ａ：「うーん。そうかも。だって，逃げる人もつかまりにくいって言った方がその遊びのよいところが伝わるもんね。」

Ｂ：「（ピンクの線を引き直しながら）だから，大事ってことでしょ。」

３　成果と課題

本校国語科では，**「自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども」**の姿が現れるよう，その授業における具体の姿や学習指導の工夫について研究を進めてきた。その結果，次のような成果と課題が明らかになった。

〇成果

文学的な文章の学習においては，録音した音読を聴いたことが，互いの想像の違いの気付きにつながった。そして，音読した箇所と本文の叙述とを照らし合わせながら，友達が想像したことを受け止めて聴いていた。想像したことを受け止めてもらうことができた児童は，本文の叙述と自分の考えとの結び付きを考え始め，より納得のいく考えへと変容させていた。

説明的な文章の学習においては，加工した本文を比較したことが，互いの大事だと考える本文の叙

述の違いの気付きにつながった。そして，考えとその根拠となる本文の叙述とを照らし合わせながら，その結び付きを受け止めて聴いていた。自分の大事な部分を受け止めてもらうことができた児童は，自分が大事な部分と考える本文の叙述との結び付きを再考し，より納得のいく考えへと変容させていた。

これらの姿は，国語科における，**「自他やテキストの言葉を基に友達の考えを受け止め，対象と言葉，言葉と言葉との関係についての友達の考えを深める子ども」**の姿である。この姿が現れたのは，学習指導の工夫により，友達との聴き合いの中で，その場の思い付きや自分の好みで捉えたテキストの言葉だけでなく，課題解決への必要性と照らし合わせて，テキストの言葉を捉え直すことができたためだと言える。

〇課題

文学的な文章の学習においても，説明的な文章の学習においても，互いの考えの違いを明確に捉えることができない場合，本文の叙述を根拠にして考えを伝えるのみに留まり，聴き合い続ける姿には至らないことが明らかになった。そのため，文学的な文章については，考えの根拠となる本文の叙述をより明確に可視化した学習指導の工夫を今後は行っていきたい。説明的な文章については，共有する際の本文の範囲や共有する相手を限定化した学習指導の工夫を今後は行っていきたい。

【参考文献】

・文部科学省『小学校学習指導要領解説　国語編』，平成30年2月，東洋館出版社。
・文部科学省「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～」平成30年６月。
・石井順治『「対話的学び」をつくる－聴き合い学び合う授業』，令和元年８月，ぎょうせい。
・高橋俊三『声を届ける―音読・朗読・群読の授業』，平成20年4月，三省堂。
・細川大輔・鈴木秀樹『楽しみながら力を付ける！国語授業のＩＣＴ簡単面白活用術50』，令和元年8月，明治図書。